

社会科教育における博物館活用の実践と意義：小学校教員養成課程の取組を中心として

著者	菊地 達夫
雑誌名	生涯学習研究と実践：北翔大学生涯学習研究所研究紀要
巻	11
ページ	191-200
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002229/

社会科教育における博物館活用の実践と意義

－小学校教員養成課程の取組を中心として－

Practice and the Significance of Museum Utilization in Social Education

菊 地 達 夫

KIKUCHI, TATSUO

I. はじめに

現行の小学校学習指導要領社会では、博物館の活用に関する記述として以下のようにある。指導計画作成上の留意点として、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」とある。また、解説では、想定する博物館として、歴史博物館、郷土資料館、民芸館、産業博物館などを例示している。博物館の活用意義は、見学や調査活動を通じて、児童の意欲や学習効果を高める点を強調している。そのため、博物館の活用は、各学年において期待できる。博物館の活用に関する記述は、旧学習指導要領（平成元年版）から明記された。

小学校教員養成課程では、社会科関連の科目において、博物館の活用を取り入れる義務はない。しかしながら、その多くは、何らかの形で実施していよう。一部の教員養成課程では、地域調査法といった科目を設け、地理巡検と博物館の見学を織り交ぜた熱心なところもある。

他方、社会科での活用について博物館側の声は必ずしも歓迎するものばかりではない。現行学習指導要領から新設した「総合的な学習の時間」によって、学校教育において博物館を活用する機会は確かに増えた。しかしながら、その活用の実態は、学習効果を期待できるものと限らない。例えば、活用の目的がどの教科か又は総合学習なのかよくわからない。事前の打ち合わせが全くない。遠足の途中雨天時の避難施設として活用される、と指摘をこれまで耳にした。これらは、教員と博物館の綿密な計画に乏しく、活用のあり方が博物館側に丸投げとなっていることが想像に難くない。

筆者は、原因の一つとして、教員養成課程時に行う博物館の活用のあり方に問題があると考えている。学生には、確かに博物館の活用・体験について学ぶ機会は増した。一方で、博物館の活用にあたり、事前後の指導内容、既習事項との関連性といった教員が意識すべき内容について十分な説明をしていないのではと思われる。そのため、現場教員となって、博物館の活用を多用しても、効果的な学習に結びつかない。

先行研究では、小学校教員養成課程に属する学生を対象として、博物館の活用に関する考察した論考はほとんどみられない。また、社会科教育関連の学会出版物を見る限り、博物館の活用をそれほど重要としていない。例えば、日本社会科教育学会編『社会科教育事典』には、博

博物館の活用を扱う項目がなく、全国社会科教育学会編『社会科教育学研究ハンドブック』でも同様であった。他方、日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』では、博物館・資料館の活用という項目が盛り込まれている。

このような状況をふまえ、本稿では、小学校教員養成課程における社会科関連科目において、教員と博物館の密接な連携・調整を意識させながら博物館の見学を行い、その評価を学生と博物館学芸員のものを交え考察する。また、改正教育基本法をはじめ次期学習指導要領作成など教育業界は変革期にある。この点も、博物館の活用との関連において触れる必要があろう。

なお、本稿で取り上げる北海道立埋蔵文化財センターは、博物館法において博物館相当施設に含まれる。また、管理運営は、指定管理者（2006年～2009年）である財団法人北海道立埋蔵文化財センターが行っている。当センターの方は、職員の位置付けにある。ただ、職員の条件は、一部を除き、博物館学芸員資格、社会教育主事資格、教育職員免許状のいずれかを有することが望ましいとしている。

以下では、当センターを歴史系博物館に相当するものと考え、便宜的に施設を「博物館」、職員を「学芸員」として使用する。

Ⅱ. 博物館の活用の意義

2006年12月に改正した教育基本法では、博物館の活用を考える上で、重要な文言を確認できる¹⁾。その文言とは、第2条五の教育の目標である。具体的には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国の郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」である。この中で、「伝統と文化を尊重」と「郷土を愛する」内容において博物館の活用を期待できる。周知のように、博物館は、地域に根ざした動態的な資料を博物館学芸員（以下、学芸員とする）の手によって収集・展示・保管している。

改正教育基本法は、次期学習指導要領作成などに影響を与えている。現行学習指導要領社会において、一度削除した「縄文時代」の学習を復活する動きがみられる²⁾。また、北海道教育委員会では、第4次北海道教育長期総合計画の原案に「ふるさと教育の充実」を盛り込んだ³⁾。具体的には、(1) 地域の施設や人材などを活用し地域の自然や歴史、伝統、文化などの理解を深めること、(2) すべての教員が北方領土学習を理解し指導できるよう初任者研修の年間項目として取り上げること、(3) アイヌ民族学習の充実に向けてアイヌ教育相談員を学校に招き、アイヌ文化をこどもが直接体験する機会を設けること、を挙げている。とりわけ、博物館の活用は、(1) の項目に含まれるが、(2) や (3) の内容を深める役割としても重要となろう。これらは、改正教育基本法の第2条五の内容をふまえたことを指摘している。

総務省、文部科学省、農林水産省では、小学生に農家などで1週間程度の宿泊体験として「子ども農山漁村交流プロジェクト」を2008年から開始すると発表している⁴⁾。博物館の活用は、地域産業の変遷を理解する一手段として間接的な役割を期待できる。

次期学習指導要領では、授業時間数（社会）を中・高学年で若干増やすことを素案としてい

る⁵⁾。授業時間数の増加は、博物館を活用する校外学習をより後押しする機会となろう。

さらには、生涯学習社会の構築が叫ばれて久しいが、生涯学習を推進する観点からも博物館の活用は学校教育において望まれる。また、博物館は、地域において有力な観光資源になる場合も少なくない。こうした場合、疲弊する地域経済を発展させる中核施設となろう。

博物館の活用は、教育業界からの変化ばかりに限らない。小学校社会では、身近な地域として市町村単位で捉えることが多い。昨今の平成の自治体合併では、地理的範囲を大きく変えた。北海道では、自治体数180カ所となった。その多くは、周辺自治体と合併したことで行政域を拡大した。例えば、北見市では、盆地上の都市ではなくなり、オホーツク海岸に位置する自治体となった。また、釧路市では、飛び地の行政域が生じた。さらに、北斗市や大空町のように新自治体名を採用したところもある。身近な地域を扱う地域学習は、既存の自治体発行の副読本に頼るには限界が生じつつある。新しい副読本作成は、予算配分の課題があり、その編集は追いついていない。新たな合併自治体の場合、身近な地域を正しく理解する手段として、博物館の活用が適する。むろん、複数の博物館を活用することになるが、児童の思考を揺さぶるには願ってもない機会となろう。

以上から、博物館の活用は、社会科において最も求められている学習活動の一つと判断できる。加えて、他教科・領域における活用の拡大や生涯学習、地域経済の発展に寄与する可能性もあろう。

Ⅲ. 博物館の活用の事例

博物館の活用は、前期講義科目「社会」で行った。これまで、社会科の教育史と現行学習指導要領社会の各学年の目標について確認している。

(1) 事前指導

事前指導は、博物館見学の3日前に実施した。主な指導内容は、(1) 前時までの既習事項との関連、(2) 博物館資料の見方・考え方、(3) 見学に伴う諸注意、(4) 教員と博物館の連携・調整についてである。

(1) では、学習指導要領における各学年の目標を取り上げ、北海道を中心として、具体的な地域教材を考えさせることに重点を置いてきた。博物館を活用する場合、どの学年のどの場面で取り入れることができるかを、考えるよう指示をしている。このような指示がないと、既習事項と博物館の講義は接点を失いがちとなる。

(2) では、歴史民俗博物館が例示している内容を活用している。博物館資料の見方では、①展示資料を見る②展示資料の名前を知る③展示資料の作成年代を知る④展示資料に関する解説を読む⑤展示資料を上下左右から観察する⑥近くに関係ありそうな資料を比較して見る、の6項目である。博物館資料の考え方では、①何に使ったのか考える②どのように使ったのか考え

る③誰がつくったかを考える④何のためにつくったのかを考える⑤人間のくらしに与えた影響と人間の知恵について考える⑥今の時代からの時間経過を考える⑦同じ時代の資料とのつながりを考える⑧他の時代の資料への移り変わりを考える⑨当時の人間のくらしの様子を想起する⑩現在の人間のくらしと対比し、未来の人間の生き方について考える、の10項目である。これらは、個別、一定のまとまり、全体といった博物館資料の結びつきを考える上で重要である。このような指示がないまま見学すれば、十分な学習成果を期待することができない。

（3）は、日時、集合場所・時間、持ち物、公共マナー、欠席時の対応などについて確認している。これは、単なる学生に対してのものではなく、実際の児童に対して、どのような諸注意が必要かにも、触れるようにしている。例えば、児童引率の場合、徒歩、公共交通機関、貸切バスといった移動手段があり、出発前にトイレを済ませておくような指示が考えられる。

（4）は、小学校教員を目指すにあたり、教員と博物館の連携・調整がどのように行われているかを触れる。これまで、教員養成課程では、博物館の活用を講義・演習で取り入れることが珍しくなかった。それにも増して、効果的な博物館の活用に発展しない要因は、教員と博物館の連携・調整を、しっかり言及していない点にある。すなわち、現場教育では、博物館との連携・調整について、単なる見学日、人数、学年などを告げることに終始し、十分な教科との関連性や事前指導の内容を示していない可能性が高い。

以上、事前指導では、4項目を中心にを行い当日への準備とした。

（2）当日の見学

見学施設である北海道立埋蔵文化財センターは、大学近隣に位置しており、徒歩で移動できる。今回は、土曜日の午後に実施したので現地集合とした。履修者のうち、都合で若干欠席者が生じたものの、概ね時間内に集合できた。

博物館では、大きく3つの学習機会を取り入れた。具体的には、ビデオ映像の視聴、展示資料の解説、体験学習である。ビデオ映像は、埋蔵文化財センターの概要を知る上で役立つ。とりわけ、展示物である埋蔵文化財が、どのように発掘・収集・保存されるのか理解できる。また、このビデオ映像は、小学生向きなので初学者にも向いている。さらに放映時間が12分程度であり、長さとして丁度よい。ビデオ映像は、展示室内で定期的に上映しているところが多いが、一度に多くの人数で視聴するには限界がある。そのため、研修室などでビデオを活用できることが望ましい。

展示資料の解説は、博物館の見学として最も一般的なものである（写真1）。今回は、「北海道の遺跡」と題して、3つの視点からの解説を調整していただいた。3つの視点とは、「北海道の自然環境と生活」「北海道史の特色」「アイヌ文化」である。これらは、第3・4学年の地域学習又は第6学年の歴史学習に深く関係している。展示資料の解説は、見学順序を一部前後しながら行った。加えて、一部の博物館資料は、解説を省いた。

体験学習は、博物館の新たな活用として急速に普及しつつある。今回は、バックヤードの体験と勾玉作りを行った。バックヤードの体験は、普段、目に触れることはない収蔵庫に入り、いくつかの縄文土器・擦文土器などに直接触れ、大きさ、重さ、色、形態、といった視点で類似点や相違点について思考を揺さぶった（写真2）。多くの博物館資料は、レプリカを除き直接手に触れることはできない。実物の土器に触れる体験は、興味関心を抱かせる貴重な機会となった。

次の勾玉作りは、あまり手間のかからない体験学習である。体験学習の目的は、昔の人がアクセサリーという概念を持っていたこと、それをどのように加工していたか知るためのものである。当時は、加工において砥石やとくさなどを用いており、完成までかなりの時間を要した。体験では、その替わりとして紙やすり（5種類）を用いた。他には、石材、水の入ったトレイを用意してもらった（写真3）。学生は、石材の角を目の粗い紙やすりから順次削り、丸みをつくっていくといった作業行程について説明を受けた（写真4）。最初、苦戦していた学生は、学芸員のアドバイスによってコツをつかみ、要領よく作業できるようになった。最後は、薬剤をつけ、布で磨き終了である。作業時間は60分程度とした。ほとんどの学生は時間内で完成させた。完成品は、そのまま持ち帰ることができる。

以上、当日の見学の概要である。拘束時間は、体験学習までとした。なお、閉館時刻まで自由見学とし、幾人かは展示資料の撮影や学芸員への質問もみられた。

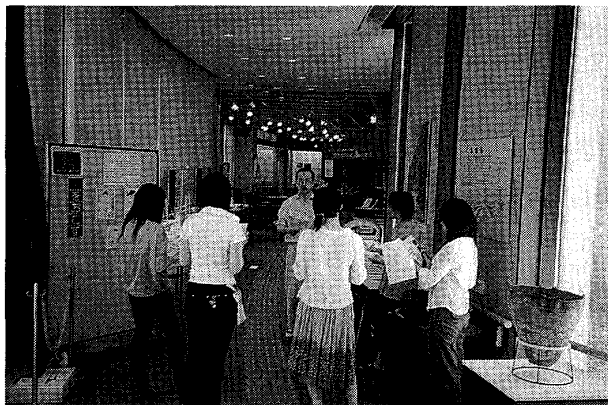


写真1 展示資料解説の様子

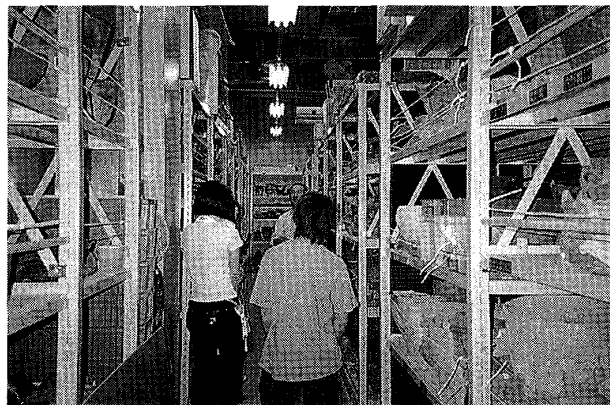


写真2 バックヤード体験の様子

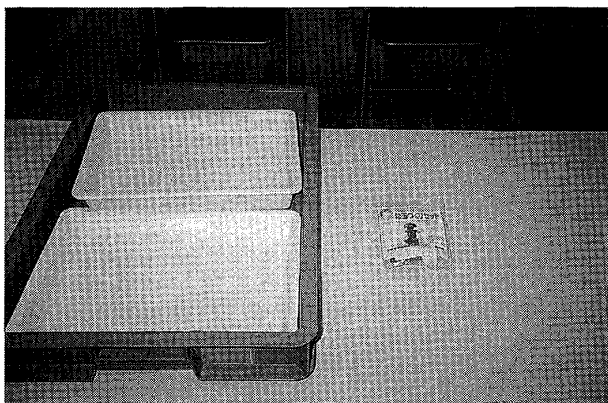


写真3 体験学習の教材

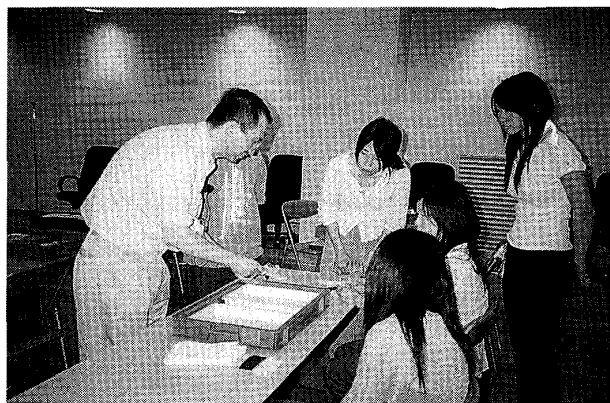


写真4 体験学習の説明の様子

（３）事後指導

事後指導では、３つの学習内容について振り返った。学生には、ビデオ映像、展示資料の解説、体験学習に分け、それぞれのポイントについて発問を交え行った。とりわけ、発問は、見学内容を自主的に振り返ることに役立っている。

続いて、教員の立場として必要な事後指導について触れた。一つは、学芸員の方にしっかりお礼・感想を伝えることである。どのような印象や感動を持ったかを伝えることは、学芸員の方に充実感を与える。筆者の場合、アンケートや感想などを記入させている。これらを事後に学芸員の方に伝え、次回以降の改善に役立てていただいている。もう一つは、児童の学習成果をしっかり伝えることである。学習成果は、口頭発表、レポート形式、ポスター発表、新聞作成など考えられる。学習成果を伝えることで、反省点を浮き彫りとすることができよう。また、学習成果は、単なる博物館の見学をまとめたものとは限らず、その前後の学習活動を含むものである。よって、学芸員の方には、博物館資料を社会科の中でどのように位置付けているか、確認することができる。

その他として、館内に常備している資料や解説シート、図書について触れた。これらは、博物館の見学を補完するものとして有効な資料である。博物館の見学のレポートを求めると、その場で見聞したことや配布資料のみでまとめようとする。他の資料を活用することでより高度な内容になることを促したい。

以上、博物館の見学について一連の流れを述べた。教員養成課程では、事前後に博物館側と連携・調整すべきことを触れることで、博物館の活用の意義が大きく異なる。すなわち、全体計画の中での位置付け、既習事項と事後学習の結びつき、事前後指導の内容、当日の見学・体験内容などについて、触れることである。こうした点に十分触れないと、博物館の見学機会を増やせば、学習効果を上げることができると、短絡的に考えがちになる。

Ⅳ．博物館の活用の評価

（１）学生評価

学生評価は、博物館の見学の前後に実施したアンケート調査と事後に提出したレポート内容からみていきたい。

まず、小学校において博物館の活用を想定する教科や領域を尋ねた。履修者のほぼ全員が、社会科と総合学習を挙げた。他に、生活科や理科がやや多いものの、図画工作科、特別活動、道徳、家庭科、国語科も挙げた。このことから、多様な教科や領域において、博物館の活用が想定できることも浮き彫りとなった。

次に、博物館の活用は、良い学習効果をもたらすか尋ねた。これも、履修者全員が良い効果

をもたらすと回答している。さらに、履修者の過去の体験を自由に記載してもらった。その多くは、社会科において郷土資料館を訪れた経験であった。ただ、一部に、事前後の指導をほとんど実施していないというものがあつた。他に、遠足や国語科の作文活動として訪れた場合もあつたようだ。

事後に行ったアンケート調査でも、博物館の活用は、良い学習効果をもたらすという点で変化はなかつた。続いて、学習機会別に自由な感想を記入してもらった。ビデオ視聴では、イメージキャラクター（ビビちゃん・フクロウ博士）を使ったもので、そのわかりやすさを指摘している。展示資料の解説では、解説を聞きながらじっくり観察できる有効性について指摘があつた。体験学習では、収蔵庫における土器の数の多さに驚いたこと、勾玉作りにおいて、体験しながら楽しく活動できる点を高く評価している。

最後に、提出レポートから、どのような部分に対して博物館の活用の有効性を判断したか、探りたい。レポート課題は、①博物館の見学について、講義全体をふまえ、わかつたこと、不思議に思つたことをまとめる②社会科における博物館の活用の有効性について、自分なりの考えをまとめることを求めた。今回は、資料、ノート、文献を持ち込み、一定時間内でレポート作成を行った。以下では、②に注目し、特筆する内容（原文）を取り上げたい。

学校の先生は、こどものプロフェッショナルであっても、それぞれの専門分野の方に匹敵する程の知識は得られない。発掘現場の様子や復元作業の大変さを直接体験した人の話を聞くからおもしろいのであつて、教室で先生がその説明をしてもこどもは実感をもてないだろう（学生A）。

展示物の観察の時間をたくさん取り、展示物を見ながら考える方がいろいろな発想を生むことできるのではないかと思つた（学生B）。

自分で何か一つのもので作りあげる楽しさやうまくできなかった悔しさなどを実際に経験することで、自分で何かをしてみたいという好奇心や失敗から学び、もう一度挑戦しようとする根性あきらめない心を育てることができると思つた（学生C）。

学生Aは、小学校教員のもっている知識や技能には限界があり、その部分を補うため博物館を活用し、学芸員の解説を取り入れることが有効であることを強調している。今回の博物館の見学では、資料と資料のつながりについて触れる場面があり、そこで有効性を強く感じたようである。学生Bは、博物館資料を直接観察することがこどもの思考をゆさぶり固定概念を払拭するのに役立つのではないかと考えた。学生Bは、①の課題において北海道産の黒曜石が他地域（国）に移出していたことに驚きを示している。すなわち、現代と違って昔は地域間交流をしていたとは考えていなかった。結局、自身の体験が、こどもにも同じように役立つと考え

た。学生Cは、体験学習の意義を強調している。とりわけ、試行錯誤しながら自主的な活動につながりやすいという点を指摘している。博物館の見学は、どちらかと言えば、受け身的な内容が多い。そのため、より一層の自主性を磨く上で体験学習は、適性をもつと考えた。

以上、履修者は、博物館の活用において高い評価を下した。事前後の評価において、概ね変化がなかった。ただ、その評価は、漠然とした良いイメージから、自己の体験を通じて確信に満ちたものになったと解釈できる。

他方、対象の講義科目「社会」は、選択科目であった。履修者は、ある程度、社会に対する興味関心をもっていただくと判断できる。よって、博物館の活用は、全般的に高評価につながる条件を有していた可能性も高い。

（２）学芸員の評価

博物館の見学終了後、学芸員の方に評価を自由記載してもらった。提出した内容には、解説した一つの一つの説明についても記載いただいた。ここでは、主として評価に関係する感想などの記載を中心に挙げる。まず、ビデオ視聴は、履修者の表情や様子から概ね理解できていると判断したようである。このビデオは、小学生向けであるが、ここ数年の博物館の見学で、一定の評価に落ち着いた。

展示資料の解説では、単純化や簡略化を意識せざるをえない状況となった。この要因は、筆者の時間制約の指示によるところが大きい。少ない時間で比較的多くの内容を含んでおり、ある程度の意見は覚悟していた。解説内容については、学生にとって難しい部分があると感じていたようだ。具体的な内容の指摘はないものの、表情や反応から難しいと感じたのであろう。ただ、アンケート調査やレポート内容、個人的な意見を求める中で、難しいと指摘する声はこれまでのところほとんどない。学芸員と学生の受け止め方において、若干の差異があった。

詳細な説明ができない部分は、配布資料として準備し、学生の復習に役立つよう心がけてもらった。配付資料は、筆者からの要請はしていないものであるが、補足資料として助かるだけでなく、事後指導やレポート作成にも重要な役割を果たしてきた。

体験学習のバックヤード見学は、収蔵庫を見せることで、資料全体のほんのわずかなものを展示しているにすぎないことを理解してもらったと感じている。また、土器を直接触れることは、その特色を理解させることができ効果的と認めた。他方、もう少し考古学的な意見や感想を期待しているところもあった。

勾玉作りの場合、事前に複製品や見本を示すが、縦断面において球面のイメージができず、最後まで修正できない学生がいることを残念に感じたようだ。また、教員養成課程に属する学生と一般学生では、前者の学生がより積極的に取り組むことを指摘している。

全体感想では、概ね意欲的に取り組んでくれたと評価している。他方で、教員養成課程に属する学生には、五感を働かせ、より思考する姿勢を期待している。また、解説や発問する過程

において、より考古学的な意見を期待した点は、専門家として当然であろう。

V. おわりに

本稿では、小学校教員養成課程において博物館の活用に注目し、事前後の指導を含め教員と博物館の連携・調整を意識させながら、その評価を学生と学芸員を交え考察してきた。以下では、各章について整理しておきたい。

第2章では、現在の学校教育を取り巻く環境が激変する中、博物館の活用が広がる可能性を示唆した。とりわけ、改正教育基本法や次期学習指導要領作成において、具体的な文言を取り上げ、博物館の活用への関連性を述べた。また、学校教育の枠を越えたところで、生涯学習、観光資源化、自治体合併による地域学習においても博物館の活用が期待できることを触れた。いくつかは、すでに長年にわたり指摘されているものもあるが、活用の多様性がある点を再度確認できた。

第3章では、博物館の見学について、事前後の指導を含め、その展開を詳細に紹介した。とりわけ、事前後の指導では、現場教員としてどのような博物館側との連携・調整が必要か、具体的な内容を提示し述べた。

第4章では、博物館の見学について、アンケート調査やレポートを指標として、評価を探った。主導役となった学芸員の方にも、事後の評価を求めた。その結果、博物館の見学について、学生と学芸員の評価は、総じて高いものとなった。むろん、立場の違いがあり、学習成果の期待度に若干の差異があった点は否めない。また、教員と博物館側の連携・調整については、レポートの記載内容から、その必要性を認めたことを確認できた。このことは、筆者の思惑について、一定の理解が示されたと解釈してよからう。

最後に、本稿の課題について触れたい。すでに述べたように、今回は、選択科目「社会」の履修者を対象にしたものであった。そのため、博物館の活用に対して、一定の興味・関心をもっていた層と判断できる。よって、博物館の見学に対する評価は、当然、高くなると予想できた。小学校教員の免許状取得を目指すその他の学生が、同様な評価をするかわからない。こうした層を含めた考察が、今後は必要となろう。

付記

本稿作成にあたり、対象科目の履修者と財団法人北海道埋蔵物文化財センター調査部主査の倉橋直孝氏及び関係者の方には、多大なご協力をいただいた。とくに、倉橋氏には、直接の学生指導、写真撮影の許可、事後アンケートへの協力など大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 北海道新聞朝刊2006年12月16日掲載記事

- 2) 北海道新聞朝刊2007年9月11日掲載記事
- 3) 北海道新聞朝刊2007年9月10日掲載記事
- 4) 北海道新聞朝刊2007年8月31日掲載記事
- 5) 小学校学習指導要領改定素案要旨より

文 献

- 一場郁夫（1999）：『歴史発見 歴博活用アイデア』財団法人歴史民俗博物館振興会
- 北俊夫ほか（2001）：『博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり』明治図書
- 全国社会科教育学会編（2001）：『社会科教育学ハンドブック』明治図書
- 東京学芸大学社会科教育学研究室編（2006）：『小学校社会科教師の専門性育成』教育出版
- 日本社会科教育学会編（2000）：『社会科教育事典』ぎょうせい
- 日本地理教育学会編（2006）：『地理教育用語技能事典』帝国書院
- 文部省（1999）：『小学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版株式会社